

# 1 犬の鼻

まっ黒で、濡れていて、まだらで、正面にはへ音記号のような洞窟がふたつ見える——それがフイネガンの鼻だ。アプトンのほうははっきりしたふたつの凹みになっていて、全体に短いヒゲが気をつけの姿勢で生えている。

これがわたしの犬たちだ。そしてこれがその犬たちの鼻である。

犬の認知について調べはじめるまで、わたしは犬の鼻についてあまり考えたことはなかった。もちろん来客の股間に不作法に鼻を突っこんだりすれば叱るし、薬を飲ませるときは鼻にピーナッツバターを塗ったりもする。だがそんなときでさえ、犬の鼻そのもの——その形、その動き、奥へと続くとてもなく入り組んだ洞窟——について、関心をもつことはほとんどなかった。

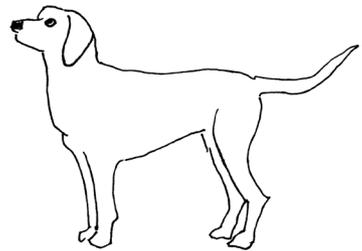
犬の鼻に対してだけではない。わたしたちは互いに相手の鼻をじっくり観察することなどめった

にない。顔のどのパーツより目立っているにもかかわらず——しかも顔だけでなく体全体をリードしているというのに。ためしにパートナーの鼻でも母親の鼻でも、実物を見ないで絵が描けるだろうか。たとえそれが鳥の嘴くちばしみたいな鼻だったり、ボタンみたいな鼻だったりすれば別だが、たいていわたしたちにとってそれはただの鼻でしかないのだ。つぶれた肉厚のテトラにふたつの鼻孔が付いているだけ。

わたしは息子の鼻を見る。だがだいたいは鼻の表面だけだ——色白の肌こそばかすが集まりかけている。だが、犬の鼻づらはわたしのありったけの注意を引きつける。今のわたしは犬を見ると、まず第一に鼻を見る。わたしは犬に夢中で、犬を知りたいと思っている。犬を知りたい、それは、「犬であるとはどういうことか」に興味があるということだ。そのすべては鼻からはじまる。

犬は鼻を介して、ものを見、ものを知る。追跡犬ばかりではない。ソファでああなたの隣に寝そべっている犬もそうだ。犬たちが匂いをもとに得ている世界に関する情報は、信じられないほど豊かである。人間もかつてはその豊かさを知っていたし、それに基づいて行動していた。だがそれを顧みなくなってもうずいぶんになる。

わたしたちがもっていないながらほとんど無視しているこの感覚源を嗅いで、活用して、犬は人間のための情報提供者になってくれた。彼らがごく自然に知ること、それをわたしたちに教える訓練を受けたのが仕事犬だ。彼らは違法ドラッグや持ちこみ禁止の有害な動植物を検知する。だがそれだ



けではない。犬はこれから天気がどうなるかを知る。午後になるとどんな匂いになるか。あなたの気持ちか沈んでいるのか昂ぶっているのかもわかってしまう。吸いこむ空気はどの一息も情報に満ちている。そこにはたっただいま通りすぎた人の匂いがまだ残っている。だれもが嗅覚痕跡を残して通りすぎていく。犬はそよ風に乗って運ばれる花粉や草の香りをとらえる。どの匂いにも、ついさっき近くにいて歩いていて、走っていた、うずくまっていた、死んでいた動物の痕跡が捕らえられている。吸いこむ空気には、遠くの暴風雨からの電荷が、そして湿り気をおびた活発な分子が捕らえられている。

この本でわたしは、犬の鼻が何を知っているのかを探ろうと思う。今まで一度も取り上げられなかったテーマだ。犬があなたの体に鼻を寄せ、地面や他の犬の毛の中に深く鼻を突っこむとき、いったい何を嗅いでいるのか？ あなたの犬はあなたについて何を知っているのか。あなた自身が知らないようなことを、はたして犬は知っているのだろうか。犬にとって日々の先導役は鼻である。その驚くべき鼻で世界を嗅ぐというのはどんなものなのか。

それを探るために、わたしは追跡犬を追跡することにした。この何年かにわたって、わたしは検知犬が成長し、訓練を受け、それがドラッグであれ食べ物であれ人であれ、獲物を見つけたすのを観察した。バーナード・カレッジにあるわたしの「犬認知研究室」では、ペットの犬が自分について、他の犬について、また自分たちが暮らしている人間世界の匂いについて、どのように経験しているかを調べてきた。犬の鼻について研究し、モデル化している科学者たちからも話を聞いた。犬のトレーナーやハンドラーとも話した。それは犬の嗅覚世界のすべてと、それを導く素晴らしい器

官について検証するための調査だった。

だが同時にそれは、わたしたちの顔にある鼻を知ることでもあった。わたしたち人間はもう何千年も前から匂いを嗅ぐように自分たちを訓練していいし、その方法を身につけてもいい。たとえば今、顔からたった数十センチ離れているだけのこの本の匂いを嗅いでいる人が何人いるだろう。だが世の中には匂いを嗅いでいる人たちがいる。わたしはそうした人びとを見つけたし、そのやり方に倣うことにした。

わたしもまた、匂いを嗅がないでこれまでの人生を過ごしてきた。そこでわたしは犬たちからアドバイスをもらうことにした。犬たちの行動を真似するのだ。わたしは思いきって、少しだけ犬のようになることにした。前著『犬から見た世界』のなかで、わたしは犬であるとはどういうことかについて想像力を飛躍させたが、ここでは四つん這いで飛躍する。わたしは自分の鼻を、犬の鼻がいくところ近づける。そして匂いを嗅ぐ。

まずは自分自身の匂いに対する感覚についてもっと知ることから始めよう。そのあと、犬の心と鼻をもつとはどういうことか、自分の鼻がより上手に思いたせるように、訓練に入ることにする。

わたしにインスピレーションを与え、ガイド役をつとめてくれるのはフィネガンとアプトン、わたしたち家族の愛犬だ。二匹とも雑種犬、それも猛烈にカリスマ性のある雑種犬である。夫とわたしはフィネガンの鼻と出会ったのは、捨てられた犬を南部から引き取っているシエルターのケージのバーの間だった。生後四か月、以前に白癬はくせきやバルボにかかっており、治りつつあったが、痩せて

すこし骨張っていた。わたしはあまりシエルターには行かないようにしている。行けば間違いなく新しい犬だの猫だのを連れて帰るはめになるからだ。その日、ケージの中のフィンガンとはじめて目を合わせたとき、彼ははげしく尻尾をふり、バーの間に突っこんだわたしの指を舐め、わたしが指を引っこめると今度は逆に自分の鼻をバーから突きだした。わたしたちがそこを離れたあとも、彼は我慢づよくすわって待っていた。わたしは何度もふりかえった。彼はすわって……そして待っていた。わたしたちは彼をケージから出してもらった。彼は夫とわたしのあいだを動きまわり、わたしたちの顔をかわるがわる見つめた。疲れたのだから、やがて彼はわたしにもたれかかった。それで決まりだった。わたしたちは彼を家に連れて帰った。

そのときからフィンは八歳年をとっている。それでもまだ彼には、わたしにもたれかかった子犬の面影がある。毛並はまるで毎日ブラシをかけているみたいにつやつやと黒光りしている。だが一番目を引くのは、彼が何かを見るときの見方だ。フィンを見る人はだれでも、この犬が今この瞬間に起きていることにいつも気づいているという印象を受ける。目はわたしたちを突き刺すようだ。その目はわたしたちを追う。他の動物が悪いことをすると、目でわたしたちに確認しようとする。わたしたちがドアに向かうと、その目は悲しげにわたしたちを見守る。耳を後ろに倒し、目を大きく見開いているフィンを置いて出ていくのは容易ではない。家に戻ると、目で見るだけではない。鼻もわたしたちを調べる。許されるぎりぎりまで鼻を近づけ、わたしたちがどこに行き、何を食べ、だれに触り、あるいは撫でたか調べようとする。帰り道で犬に会えば、必ずフィンの取り調べが待っている。

わたしは、フィンには「プロの犬」だと考えたい気がする。彼はとても洗練されている。とくに教えたことはないのに、わたしたちが家の犬として期待しているものにびったりはまってくれ、わたしたち家族が作っている小さな文化をのみこんだ。一方、引き取ったときすでに三歳だったアプトンのほうは、言ってみれば野良犬である。シェルターに遺棄されていた彼を引き取ったのは三年前だ。遺棄された当時の彼の写真を見たことがある。小型のハウンドで、頭のサイズにくらべて耳が大きすぎる。鼻は輪郭が不鮮明だ。そのあと頭と体は大きく育った。今の彼は大きな、ぶちのハウンドミックスで、大きな目とくるくる巻いた尻尾をもっている。鼻づらにはヒゲが点々と生えている。頬ほほは垂れている。アプトンは人よりも犬といえるほうが落ち着くようだ。どんな犬に対しても、どうしようもなくフレンドリーである。走り方はひよろひよろしていかにも間が抜けている。どの写真を見ても、流線形のアプトン、アスリートみたいなアプトン、すらっとしたアプトンなどいろいろ走っているとき、その頬はバタバタはためき、体が傾き、耳は外側に開いている。彼はまったくもっておぼかさんだ……いやはや。わが家にくる前、彼は都会の犬ではなかったから、どんな音にもたちまち驚いてしまう——車のドア、ゴミ収集車、ガレージのドア、道路標識が風に揺れる、削岩機、街路樹にひっかかってはためく紙袋、道路の角から急に人が現れる。とにかくあらゆるものに反応する。そんなわけで、いつもはこのふたつの鼻のあとについて、彼らが嗅いでいるさまざまな汚らしいスポットを訪れているものの、新しい匂い嗅ぎ調査のために連れ出すのはフィンだけである。本書の半分はフィンが書いたと言えらるだろう。



ここでひと息（鼻から吸ってね）。匂いと匂いを嗅ぐ旅をつづけるとしよう。犬の嗅覚能力について、そしてあなた自身の鼻の能力についての科学らしからぬ科学をめぐるツアーだ。その成果はわたしたちに発見されるのを待っている。犬のリードに従うことによって、わたしたちは犬から、自分にはないものについて学ぶことができる。そのいくらかはわたしたちの感じる能力を超えており、またいくらかは、ただ案内役が必要だっただけだ。世界は匂いに満ちている。だがわたしたちにはそういう豊かな世界スペースワールドがない。そこで犬がわたしたちの眼鏡スペースワールドとして役立ってくれる。

それによってわたしたちはまた、自分と世界についての、ひょっとしたらもっと原始的な、いわゆる「動物の状態」がもたらした知識をふたたび手に入れられるかもしれない。テクノロジーと実験室でのテストが作る文化のなかですっかり忘れられてしまった知識だ。動物のあとをついていくことによって、わたしたちはみずからの存在にもっと敏感になる。犬たちのあとをついていくことによって、わたしたちはもの言わぬ忠実なパートナーの日々の経験を理解し始めるのだ。

## 2 匂いを嗅ぐ者

そのバタつきトーストの匂いは、いかにもはつきりした言葉で、ヒキガエルに話しかけたのでした——暖かい台所のことを。霜のおりた晴れた朝の朝食のことを。冬の夕方、散歩を終えてスリッパにはきかえた足を炉格子に乗せてくつろぐ、いごこちのいい居間の炉端のことを。満足そうにネコがのどを鳴らす音を。眠そうなカナリアたちのさえずりを。

——ケネス・グレーアム『たのしい川辺』（石井桃子訳、岩波少年文庫）

動物がどれくらい匂いを嗅ぐのか、わたしたちにはほとんどわかっていない。このことを思い出させてくれるものが、わが家の本棚にはたくさん詰まっている。わたしの本棚ではない。六歳の息子の本棚だ。すぐれた児童文学作家たちの何人かは匂いにきわめて敏感だった。ロアルド・ダール

の物語に出てくる子供の匂いを嗅ぐモンスターや甘い匂いのチョコレートのお城は、ウィリアム・スタイグの作品中の動物の主人公たちと肩を並べる。スタイグのドミニックは、放浪の旅にあこがれる冒険好きな犬で、納屋暮らしの犬仲間たちに別れを告げ、世界を探検する旅に出る。「みんなを抱きしめて匂いを嗅ぐよ、愛をこめて」と、犬らしい別れの言葉を残して。旅するドミニックを導くのは、その「すべてを知る」鼻だ。彼は悪者のキツネを嗅ぎだす——「キツネが一年前にちよつと触っただけだって、ドミニックにはその匂いがわかっただろう」。お茶、砂糖、ミルクを嗅ぎ出しておやつにする。彼の鼻は病気のブタ、ワニの魔女、そして見知らぬ町の住民たちを見つけ出す。「ドミニックはいつも最初に匂いに気づく」とスタイグは書いた。ケネス・グレアムの『たのしい川辺』に住む動物たちが気づくのは、「あたたかさそうで、おいしそうな、色とりどりのにおい」であり、それが「もつれあい、からみあい、ついに完全無欠な、えもいわれないにおいになって、ただよって」いるのだった。それはまるで自然が、じぶんの心をじぶんの子供たちによくわからせようというので、女神の形をとってあらわれたかのよう」だった。

これでもまだ動物たちが気づくことの半分にもならない。

わたしは家で、犬の鼻の鋭敏さを見せつける二匹の四足歩行の連中と一緒に暮らしている。ずいぶん前に赤ん坊の皿から飛んでいったごく小さな食べ物のかげらを彼らが見つけるのを見て、わたしは驚く。だが明らかに彼らの嗅覚の鋭さはそんな程度ではすまない。わたしが日々気づくのがその程度ということなのだ。

犬の鼻の鋭さを科学的に計測するのが難しいのは、犬の鼻のせいというより、計測器具の能力の

せいであり、その器具で計測されることに犬があまり興味を示さないためでもある。ペットの犬も追跡犬もさまざまな閾値検出タスクをやらされている。徐々に匂いを薄めていき、どの時点で犬が気づかなくなるかを見るタスクだ。たとえば、バナナ（酢酸アミル）の匂いのついた容器を、匂いのついていない複数の容器から選び出させるタスクがある。匂いが一兆分の一か二に薄められるまでは、犬はその容器を見つけた。一兆滴の水に酢酸アミルを一、二滴落とした割合だ。一匹のきわめて協力的なフオックステリアを使った初期の実験で、その犬は一億立方メートルの空気中から一ミリグラムの酪酸（くさいソックスの匂い）をきちんと検知できた。もちろんあなただって、寝室でパートナーが脱いだばかりのくさいソックスには気づくだろう。そのくさい寝室内の空気の量は、だいたい四〇立法メートルくらいだろうか。だが犬は、フロリダのNASAケネディ宇宙センターにある巨大なスペースシャトル組み立て棟よりも大きな部屋でだけかがソックスを脱いだとしても、それがわかるのだ。どんな犬でも、四〇〇万立方メートルのスペースセンターに入って、汗臭い宇宙飛行士をつきとめられるだろう。

爆発物検知犬は、TNTなどの爆発物がごく微量であっても匂いに気づく。わずか一ピコグラム——一兆分の一グラム——でもつきとめられるのだ。一ピコグラムの匂いに気づくというのはどんな感じなのだろうか？ 火薬探知犬は自分が探している匂いについて、とても好ましい連想をもつようになっている。ではわたしたちにとって好ましい連想をもたらす芳香といえは……そう、キッチンで焼いているシナモンロールがある。ふつうのシナモンロールにはおよそ一グラムのシナモンが含まれる。人間の鼻はそれをとらえる——家のドアを開けたとたんにとびこんでくる匂いだ。では、

一兆個のシナモンロールだったらどんな匂いになるか、想像してみよう。それが、家のドアを開けたときに連れていた犬が嗅ぐ匂いだ。

犬の鼻の鋭敏さは、その行動を見るだけでも測ることができる。狩猟犬や追跡犬は当たり前のように、以前に通り返りすぎた獲物や人びとの匂いの跡をつける。ときには峻険げんしい山地に残された数日前の匂いまで嗅ぎつけるのだ。以前見たディスクバリーチャンネルのビデオでは、パーソナリティがブラッドハウンドの「裏をかく」ために川を横断し、消臭剤を体に噴霧し、犬の気をそらすためにソーセージを撒き、さらに戻ってまた別の道を行くという作戦をとっていた。だがその犬はパーソナリティが走った道をたどり、川を横断し、ソーセージを見つけ（だが無視し）、それから逆戻りして、簡単にその人物を見つけだした。

分かれ道に出くわしたときでも、追跡犬はわずか五つの足跡を嗅ぐだけで、足跡の主がどちらに行ったのかわかる。二秒たらずの間に付けられたその五つの足跡は、どれもその人物の匂いを一定量とどめている。しかも第一の足跡から第五の足跡まで、少しずつ匂いが強くなっているため、犬には答えがわかるのである。その道を他の人が走ったり、他のトレイルと交差したりしていても、犬は追っている人物を見つけることができる。

このように、犬は人を追跡するうえできわめてすぐれた能力を発揮するから、オランダやドイツ、ポーランドなど、いくつかの国では、犬による匂いの面通しが裁判での証拠として認められている。匂いの面通しというのは、言葉そのままの意味ではない。人間の場合の面通しのように、容疑者と無実の人びと（フィラーと呼ばれる）が並ぶ前で、犬がそれぞれの匂いを嗅いで査定するというの

ではなく、<sup>\*</sup>犬は容疑者とファイラーが触れた一列の金属のバーを嗅いでいき、犯罪現場の匂いと合致する匂いを選びだす。それが真犯人の匂いというわけだ。

たった今あなたのそばにいる犬もまた、日々、みごとに嗅覚パフォーマンスを見せてわたしたちを驚かせ、時に警告を発している。そうした行動の多くはわたしたちにとってお馴染みである。お馴染みでないのは、その背後にある匂いなのだ。

犬の鼻の鋭さを発見するために、まずは犬が一日のなかで何を嗅ぐことができ、実際に何を嗅いでいるのかを見てみよう。わたしたちの犬はわたしたちの足もとで、わたしたちのかたわらで、わたしたちといわば足並みをそろえて暮らしている。犬がわたしたちを見つめたり、あるいは遠くで吠えている犬に目をこらしているように見えるとき、わたしたちは彼らの目をのぞきこみ、何をどんなふうに見ているのか知ろうとする。だが実のところ彼らの行動の大半は鼻に、世界を嗅ぐことに関係しているのだ。

**あなたの匂いを嗅げてうれしいです！**

好き勝手にさせておけば、たいていの犬は不審者の消えた足跡を追ったりはしないし、金属バーの列を順々に嗅いでいこうともしないだろう。犬が好きなのは他の犬の匂いを嗅ぐことだ。一方、人間が好きなのは他の人間を見ることがある。部屋に一人でいても、動いている人だろうが静止している人だろうが、とにかく人の映像を見たがる。犬に犬のピンナップ写真を見せても喜ばないが、